

患者の全身管理を目指す、独自の「内科的泌尿器科」を提唱

「もう癌と闘いたくない」「最後の望みを託したい」
がん治療における多様な思いに応える、優しい医療に注力



Tomorrow's medical treatment is supported.
Akira Yamaguchi

「内科的泌尿器科の考えを軸に、泌尿器の疾患から他の臓器の疾患との関連を疑い、身体全体を考えながら治療にあたります」

旭泌尿器クリニック

院長 山口 旭



有能な総合臨床医を養成する自治医科大学に学ぶ
へき地医療、地域医療を通して社会に貢献できる総合医療を確立

山口院長が医師を志したのは、幼い頃から大きくなったら人の役に立つ仕事に就きたいとの強い思いが底辺にあったからだ。高校のある授業で自治医科大学の存在を知った山口院長はその建学の精神に共鳴し、へき地医療、地域医療を通して社会に貢献できる人間になろうと思立った。

超高齢社会がますます進展するに伴い、高齢者を取り巻く医療の在り方も大きく変化し、これに対応した最適の医療が強く求められている。膨らむ医療費、介護施設の絶対的不足、治療医学から予防医療へ、様々な問題とテーマを抱えながらも人口比率は着実に高齢化の度合いを増していく。

こうした状況のなか、医療は専門分化が進み、細分化した専門の医療技術が高度に進化する一方で、身近な地域の「かかりつけ医」の役割として、患者のあらゆる疾患を診る総合医療への期待が高まっている。

大阪市天王寺区筆ヶ崎町。上町台地の高層マンションが建ち並ぶ一角に、昨年旭泌尿器クリニックが開院した。院長の山口旭医師はへき地医療の充実、地域の福祉と健康増進を目的に創設された自治医科大学に学び、過疎が進む奈良県の小村で「なんでも診る村のひとり医師」としての経験を積んだ。

様々な科目を横断的に診断できる総合医療を実践。このキャリアを通して「内科的泌尿器科」という考えにたどり着く。

患者背景を常に把握し、泌尿器およびそれに派生する健康問題を全人的に対応、患者の全身管理を行う。今日的医療に取り組んでいる。



旭泌尿器クリニックは「内科的泌尿器科」という理念で平成26年に開院した

また、「私は泌尿器科の医療を専門的に研究しようというよりは、泌尿器医療を通して全人的に対応し、『人の健康』を考えていこうとする立場です。元来泌尿器科は外科手術治療が中心だったのですが、今は投薬で治す方法も多くなっています。ただ、その場合は内科的な知識、データをもとに要因を考えていかなければならない。透析、血漿交換といった特殊な医療知識も必要となります。泌尿器の疾患から他の臓器の疾患が見つかったり、泌尿器疾



泌尿器科医療を通して「病い」を全体的視点から捉える 「内科的泌尿器科」という医療理念にたどり着く

こうしたへき地医療の経験を通して山口院長は、「病い」を単に疾患として捉えるのではなく、疾患を抱えて苦しむ「人」の視点から病いを捉え、その全身の管理を行い健康な生活を提供しようという考えを持った。だから、疾患の症状改善を追究するだけでなく、その症状が現れたところの在り方や背景まで探り、根本要因を突きつめて治療にあたる。また、他の疾患の要因との関連も考えて、全身

の健康管理を目指す。そして、患者の病いへの向き合い方に理解を示し、優しい医療を提供しようとしているのだ。

「もともと私が医療の道を目指したのも人の役に立ちたいという動機があったからです。地域での医療活動の経験に基づき医学的見地を踏まえ十分な対話と診察、負担の少ない検査を心掛けています。健康に問題を抱える住民の皆さんが健やかな生活を営めるよう支援していきたいと考えています」と山口院長は言う。

自治医科大学は総務省（当時自治省）が設置した大学であり、地域医療に携わる人材を育てるという設立の理念から各都道府県に2名〜3名の定員枠を設け、その枠に沿って学生が選抜される。有能な総合臨床医を養成するという観点から、臨床実習に重点を置いたカリキュラムを採用している。低学年から臨床に関連した授業に重点を置いた教育方針で、当時では他の大学より早い4年生から病棟での臨床実習を開始する。卒業後は、出身地のへき地診療所や公立病院で9年間、地域医療に従事することが求められている。山口院長は出身地の奈良県梓で合格し、栃木県下野市にある自治医科大学に入学した。総合医療の臨床医になるために十分な臨床実習を重ねた。

卒業後、奈良県立奈良病院で内科をはじめほとんどの診療科の研修を受ける一方、奈良県立大で専門の泌尿器科の研究に励む。平成10年に奈良県の上北山村に国民健康保険診療所所長として赴任。ここから山口院長の「患者の全身管理を目指す」総合医療の実践者としての歩みが始まった。

上北山村は奈良県の南東部に位置し、面積は県内で2番目の広さを持つが、人口密度は県内最低。過疎化が著しい村である。

「若い人たちは中学を終えると村を出て行きますので、高齢の人々だけが残ることになります。そうした人たちのあらゆる疾患を診てきました。風邪や外傷から、骨折、糖尿病や高血圧など生活習慣病の管理など。それから、救急患者がいれば、適切な応急処置をして救急車に同乗し、1時間以上かけて後方病院に搬送することが幾度もありました」と山口院長は当時を振り返る。

高齢者認知症への対応や、診療所へ来ることが出来ない寝たきりの患者の在宅診療にも取り組んだ。「上北山村や川上村の隅々まで、在宅診療に走り回りました。認知症の方々の診療をしていると泌尿器の疾患の状態を改善することが、他の疾患の改善につながるということを持って経験しました」と山口院長は話す。



全身の健康管理を目指し、地域の「かかりつけ泌尿器科医」の役割を果たしている

患の症状を改善することで他の病状が改善されるということがよくあります。全身のことを考えながら治療しなければなりません。治療の選択肢というか、考える範囲がものすごく広いのです」と言う。だから、それが専門として泌尿器科の道を選んだ理由のひとつでもあるというのだ。

泌尿器科をひとつの入り口として、患者の心の状況や病いに対する覚悟などを理解し、幅広い治療の選択肢のなかから最適な医療を見つけ出し、全身の健康管理を目指す。

それが「内科的泌尿器科」という考え方だ。そして、山口院長は、この考えに基づき独自の医療の場として平成26年に旭泌尿器クリニックを開設した。



「おしっこの問題」を通して地域の元気生活を応援 総合病院との機能的な連携による補完医療を展開

天王寺区の筆ヶ崎町という上町台地の一角に「桃坂コンフォガーデン」が平成19年に完成した。高層マンション4棟を擁する都心型居住区だ。

山口院長は、その居住区内のクリニックプラザに旭泌尿器クリニックを開設。この地で「内科的泌尿器科」という考え方で「おしっこの問題」を通して地域の元気生活を応援したいと考えている。

高校生の頃、生物学に興味があった山口院長は、命あるものの生息を全般的に捉えたいという思いがあった。こうした院長の資質が、今展開している「内科的泌尿器科」という全人的な医療に生きている。

診療にあたっては、常に患者の話をじっくりと聞き、家族関係から患者を取り巻く生活環境、仕事の状況などを把握して治療を行っている。

「最近、多いのが頻尿や尿失禁の悩みです。過活動膀胱と診断され、投薬治療を受けているが一向に症状が治まらず、おしっこに不安を抱えている人がたくさんいます。この場合、精神的な要因があることも多く、それを解さほぐしてその状態にあった薬を選んで治療しなければなりません。外科治療を中心とする大きな総合病院の泌尿器科ではこうした心の問題にまで配慮することは困難です」と言う。あちらこちら

の総合病院の泌尿器科を受診したが、思うように症状が改善せず、旭泌尿器クリニックでようやく快方向かい始めたという患者も多い。

「男性特有の前立腺疾患、近年男性にもあることが明らかになった更年期障害。男性ホルモンが減少すると集中力や意欲が低下し、さらに排尿機能や男性機能、認知機能も衰えてきます。こうした場合男性ホルモン補充療法などを行います。が、心的要因も大きく関わっています。ですから常に患者さんの話をじっくりと聞いてその要因を解さほぐしていく必要があります」と山口院長は言う。

「桃坂コンフォガーデン」のすぐそばには大阪赤十字病院がある。旭泌尿器クリニックは、こうした大きな総合病院との病診連携を機能的にとることで、総合病院が担いきれない部分を補う補完医療に重要な役割を果たしている。



内科的泌尿器科を軸に、全身を 健康管理 「かかりつけ泌尿器科医」を 持ちましょう

泌尿器の疾患には他の臓器の疾患が潜んでいることが多い。旭泌尿器クリニックを受診して生活習慣病などの発見につながることも多いという。

「40歳を過ぎた頃、夜中から早朝にかけておしっこで目覚めるようになったら、気づかないうちに血圧が高くなっているのかもしれない。塩分の摂りすぎに加えて、ストレスなどをきっかけに日中に排出処理すべき過剰な

塩分を夜間にも処理しなければ間に合わなくなっているのです。このような場合も泌尿器科的治療に加えて血圧管理、水分・塩分管理を行うことで、より良い睡眠がとれるよう提案しています」と山口院長は話す。

「なんでも診ることができると」総合医療を実践してきた山口院長のもとでは、高血圧、高脂血症、糖尿病などの内科疾患の治療管理や整形分野では腰痛やヘルニアなどの保存的治療などにも対応している。

また、高齢者の場合、泌尿器の症状、不具合を治療することで、他の疾患の状態改善に結びつくことも多くある。「脳卒中や骨折で倒れたり、がん治療や認知症で半ば寝たきりの状態が続くと、おしつこの問題が必ずついてきます」と山口院長。

「こうした場合は、適切な尿路管理をしないと、尿路感染症を起し局所の皮膚炎や床ずれの原因となるばかりか、脱水症や尿毒症、敗血症を発症し、寝たきりが進み認知症の悪化をきたすこともあります。そうすると本人はもちろん介護者も大きなストレスを抱えることになります」と警鐘を鳴らす。

旭泌尿器クリニックでは、排尿障害や尿路感染症を直接治療することはもちろんだが、内科要因との関連を考慮して治療薬全体を調整している。また、水分や栄養分の管理、適切な排尿環境をつくるための装置を提案し、全身状態の改善に重点を置いて寝たきりの防止に努めている。そして、「寝たきり患者さんとはもとより、歩行が不安定な寝たきり状態の患者さんであっても泌尿器科医が積極的に健康管理に関わることが望ましい」と考えます」と言う。こうして、準寝たきり状態からの復帰を促進し、介護する人の負担を軽減して、おむつ費用の節減や、ストレス、心の問題の解決にまで取り組んでいる。「内



「がん免疫療法」「超高濃度ビタミンC」も導入。がん患者さんに優しい治療も取り組む

科的泌尿器科という考えを軸にして、泌尿器科医が人の全身状態の健康管理に関わっていくことは非常に望ましいことだと思っています。私は、かかりつけ泌尿器科医として、いわゆる内科とはちよつと違った視点で全身の健康管理を行うことで、患者さんとご家族の幸福に寄与できるものと考えています」と山口院長は「かかりつけ泌尿器科医」の役割を熱く語る。

旭泌尿器クリニックでは、長年へき地医療に携わってきた山口院長の経験を活かして高齢者の在宅医療にも積極的に取り組んでいる。病気などで通院できない状態でも医療が受けられるよう往診・訪問診療を行っている。在宅療養支援診療所の認可を受け、あらかじめ登録している自宅療養者には24時間対応できる態勢を整えている。

また、在宅でどんな診療が受けられるのかと不安に思っている患者も多い。そこで山口院長は、忙しい診療の合間を縫って平日の午後7時から在宅相談の時間を設けて、悩みを聞いている。そして、日曜日、祝日の点滴治療なども可能な限り対応している。

高齢者の一人暮らし、身体が動かかせない、仕事の都合で通院できないなど、受診の機会喪失の狭間に堕ち込んでしまう人を一人でも少なくするため今後さらに在宅診療、休日診療を充実させていく、という。



総合病院のがん治療効果を上げるための支援の治療を展開 「がん免疫細胞療法」「超高濃度ビタミンC治療」を取り入れ、がん患者に優しい治療を

がんは日本で最も死亡率の高い疾病であり、年々その死亡率は高くなり、病気で亡くなる人のうち3人に1人はがんで亡くなっている。現在その代表的な治療法が3大標準治療と言われる外科手術、抗がん剤による化学療法、放射線治療だ。だが、外科手術は患者の身体的負担が大きく、化学療法、放射線治療も共に副作用が強く、がん発生の根本原因がつかめていない現状では決定的な治療法となり得ていない。がん全体で見れば治療効果は30%前後に止まると言われている。

PROFILE 山口 旭 (やまぐち・あきら)

昭和46年奈良県桜井市生まれ。平成8年、自治医科大学医学部卒業。奈良県立奈良病院 臨床研修医(スーパーローテート)。同10年、上北山村国民健康保険診療所所長。同12年、奈良県立奈良病院泌尿器科。同14年上北山村国民健康保険診療所所長。同17年川上村国民健康保険川上診療所所長。同20年加賀白山会板谷医院泌尿器科・透析。同21年、しんいけクリニック・聖和錦秀会阪本病院。同22年医療法人光貴会しんいけクリニック理事長。同26年旭泌尿器クリニック開業。
日本泌尿器科学会泌尿器科専門医

INFORMATION 旭泌尿器クリニック

所在地 〒543-0027
大阪市天王寺区筆ヶ崎町5番52号
ウェルライフ上本町クリニックプラザ109
TEL: 06-6770-0505
予約専用 TEL: 050-5893-4714

URL <http://www.akira-uro-clinic.com/>

アクセス 近鉄大阪線 大阪上本町駅より
徒歩5分
地下鉄谷町線 谷町9丁目駅より
徒歩8分
JR環状線 鶴橋駅より徒歩8分

設立 平成26年11月(12月開業)

診療科目 泌尿器科
外来診療、在宅医療(寝たきり、ターミナル、一人暮らし高齢者の健康支援等)、自費診療部門(がん免疫細胞療法、男性更年期障害、ED治療、ビタミン等点滴治療、泌尿器科検診、自費訪問診療等)

診療時間 訪問診療: 適宜
在宅相談: 月・火・木・金曜日 19:00~(要予約)
休診日: 水・土曜日の午後、日曜祝日



こうしたなか、第4の治療法として期待されているのが「がん免疫細胞療法」だ。これは、白血球の中に元々存在する免疫細胞を体外で培養し、強化して再び体内に戻すという治療法だ。副作用が少なく、身体に優しい治療法といえる。

標準治療では効果がみられなかった末期のがんの患者や、副作用が嫌で抗がん剤治療を望まない患者などにもう一つの選択肢として注目を集めている。

免疫細胞もいくつかの種類があり、培養、強化の方法も様々にあるが、旭泌尿器クリニックでは、有数の細胞培養センターと提携し、「免疫細胞BAK療法」、「超活性NK細胞治療」、「樹状細胞ワクチン治療」、「DCハイブリット療法」という先進の免疫細胞療法を行っている。

山口院長は、「いずれも、膀胱がん、腎がん、前立腺がん、精巣腫瘍など泌尿器のがんだけでなく、全身の多くのがんについて対応しています。がん免疫細胞療法は、副作用が格段に少なく、通院治療で、化学療法や放射線治療との併用もおおむね可能です」と言う。

また、近接する大阪赤十字病院や大阪警察病院、大阪成人病センターなどの総合病院各科で行われるがん治療がより効果を上げられるよう支援する治療体制を取っている。患者の体力を維持、温存するための栄養点滴治療をはじめ、ビタミン、蛋白同化ステロイド注射、プラセンタ注射を行っている。

さらには抗がん作用も一部期待できる超高濃度ビタミンC点滴治療など、公的病院、総合病院では施行困難な治療も含め様々な方策を提案している。

山口院長は、「がんの患者さんのなかには無理に病氣と闘うのではなく、できるだけ自然の経過に委ねたいという方もいます。こうした『治療しない』という意志をしつかりと受け止め、可能な限り苦痛を取り除き、体力、免疫力を維持する治療を行っています」と噛みしめるように語る。

「治療可能ながんは別として、治療の見込みの少ない病態であれば、積極的なつらい治療をしないという選択肢もないわけではありません。大切な人の生命に関わる医師としてそれを選ぶことも一つの決断だと考えています」

山口院長は、「内科的泌尿器科」という独自の医療理念を発展進化させ、今日的な医療テーマに真摯に取り組んでいる。